GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　74

公立名門高等女学校の同窓会誌にみる「あるべき女性像」

― 県立和歌山高等女学校と府立京都第一高等女学校の比較分析から ―

土田 陽子
（京都大学大学院文学研究科グローバルCOE研究員）

2012 年 8 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

１．はじめに

高等女学校とは「良妻賢母」の養成を教育目的とした近代日本における代表的な女子中等教育機関である。本稿は、高等女学校教育が飛躍的に拡大していく 1910 年代以降の同窓会誌を分析素材とし、高等女学校卒業後の「あるべき女性像」について明らかにすることを目的としている。

近代日本における女性のあり方に関しては、「良妻賢母」思想研究や「近代家族」論を中心として研究が行われてきた（深谷 1968、小山 1991、1999、落合 1989、牟田 1996 など)。また大衆婦人雑誌が描く女性像の分析にも研究蓄積がある（木村 2010 など)。これらの先行研究は、近代化の進展によってもたらされた女性の新しいライフスタイル、すなわち性別役割イデオロギーにもとづき家事と育児を一手に引き受ける「主婦」のあり方に焦点を当てたものである。そしてよく知られているように、このようなライフスタイルを先駆的に実践していたのが高等女学校卒業生たちであった。ところが、現実の高等女学校とその卒業生たちを取り上げた事例研究は驚くほど少ない。いったい高等女学校側は、卒業生たちに対しどうあるべきと望んでいたのだろうか。それは政府の方針通りだったのだろうか。また卒業生たちはいかなる行動をとっていたのだろうか。本稿ではこれらの問いに取り組むため、高等女学校の同窓会誌に着目することにした。

同窓会誌に着目する理由は次の 2 点にある。ひとつめとして、読者が極めて限定された雑誌メディアであるという点があげられる。高等女学校卒業生が主な読者層であったとされる雑誌メディアには、大正期以降に創刊され発行部数を拡大させていた各種の婦人雑誌があった。これらの婦人雑誌は、『主婦の友』のように中流以下の大衆婦人向けのものもあれば、『婦人公論』のように社会問題に関心のある知識階級向けのものもあり、それぞれ異なる読者層を想定した誌面づくりが行われていた。とはいえ、商業誌である以上、これらは基本的には誰でも手に取ることができる。ところが高等女学校の同窓会誌はそうではない。ある特定の学校に在学したもの同士だけが情報を共有することができるのである。もう 1 点は、同窓会組織が学校組織とともに編集作業を行い、発行する雑誌メディアであったというところにある。高等女学校の同窓会誌には多くの場合、巻頭に学校生活に関する写真が載せられ、以下、具体的な記事内容としては　①校長が述べる教育方針や雑感　②学校や同窓会組織主宰の講演会の談話録　③学校教員による寄稿文　④卒業生の通信消息　⑤同窓会組織の活動記事　⑥学校行事に関する記事　⑦クラブ活動記事　⑧名簿　などの

情報が載せられている[1]。ところが、当然のことながら母校に関することについても、卒業生たちの動向に関しても全ての情報を伝えることはできない。数ある情報のなかから同窓会組織と学校組織側が在校生と卒業生に「知らせたい」「伝えたい」内容を選別し、掲載しているのである。したがって、同窓会誌において何が載せられ、語られ、主張されているのかを分析することにより、学校組織と同窓会組織が望む女性像が浮かび上がってくると考えられるのである。

２． 分析対象と方法

分析には、地方都市と大都市の公立名門高等女学校 2 校を事例として取り上げる。その理由は、公立の名門校の方がその地域の模範校として中央の方針が直接反映されやすいと思われるからである。地方都市の高等女学校には和歌山県立和歌山高等女学校（以下、和高女という）、大都市部のほうは京都府立京都第一高等女学校（以下、府一という）を選んだ。旧紀州藩城下町に位置していた和高女と京都御所の近くに位置していた府一は、どちらも県内・府内で最も早くに設立された高等女学校であり、県内・府内一の名門校とみなされていた。とはいえ、府一はその前身が華士族の子女を対象として我が国最初に設立された公立高等女学校であったということ、明治期からすでに中等教員免許が取得できる専攻科を併設していたこと、そして宮家の娘が通っていたということから、和高女に比して全国的に名門高等女学校として知られていた。これら 2 校を比較することで、大都市と地方都市、あるいは威信の差による差異と共通点を描き出すことができると思われる。

分析資料となる同窓会誌は、和高女が『ポプラ』第 2 号（1917）～10 号（1924 年）と『いしずゑ』13 号（1928 年）～24 号（1942 年）のうち 17 冊、府一は『鴨沂会雑誌』40 号（1917 年）～90 号（1942 年）のうちの 40 冊である[2]。

分析に際しては、次の記事に注目することにした。まず 1 つめとして、和高女は「談叢」欄、府一は「論説」「説苑」欄に載せられている「校長が述べる教育方針や雑感」「教育講演会の談話録」「学校教員や卒業生による寄稿文」である。なぜなら、これらの論説記事や

1　同窓会誌に載せられる記事欄はいつも同じとは限らない。「文苑」欄として和歌や俳句、日記風の文章が載せられる場合もある。

2　和高女の同窓会誌は年 1 回発行だが、1938 年、1939 年、1941 年は戦時期の方針として隔年発行となったため発行されていない。また 1 号、5 号、11 号、12 号、14 号は入手できていない。府一の同窓会誌は年 2 回発行である。49 号、55 号、57 号、60 号、61 号は入手できていない。また、78 号（1936 年）からは年 2 回のうち 1 回は名簿の発行となっており、記事は載せられていない。

講演会記事には学校側が目指すべき方向性や社会情勢への対応の指針などが述べられているからである。２つめは、同窓会組織の活動記事である。高等女学校の同窓会活動に着目した先行研究は、クラス会等を通じた卒業生同士の親密な交友活動の意味と機能を明らかにしようとしたものがほとんどであるが（黄 2002、稲垣 2007、貫田 2007、井上 2008 など）[3]、ここでは親睦会としての地方支部会やクラス会活動以外の活動に注目していきたいと考えている。

表１　県立和歌山高等女学校と府立京都第一高等女学校の沿革

	和高女		府一
		1872年	「新英学校及び女紅場」誕生
		1887年	「京都府立高等女学校」と改称。 同窓会組織「京都鴨沂会」設立・「鴨沂会雑誌」発行
		1890年	河原一郎校長　就任
1891年	和歌山市立高女として設立		
1898年	渥美千代教諭　校長心得兼務		
		1899年	本科は修業年限　5年制 「国語漢文専攻科」2年制　設置
1900年	山本由恵　教諭兼校長		
1901年	県立移管　この後男性校長が4人交替	1901年	「家事裁縫専攻科」設置
1903年	園部倭校長　就任		
		1904年	「京都府立第一高等女学校」と改称
		1905年	渥美千代教諭　廸宮（裕仁皇太子）と淳宮（秩父宮）の御用係となる
		1909年	「国語漢文専攻科」「家事裁縫専攻科」3年制となる 「社団法人京都鴨沂会」設立
1911年	技芸専修科　廃止		
1916年	同窓会誌　「ポプラ」発行		
		1917年	大石和太郎校長　就任
1921年	4年制から5年制へ	1921年	高等科設置
1924年	松扉得悟校長　就任		
		1925年	鈴木博也校長　就任
		1927年	鴨沂会に高等女学校研究科を設置
1928年	寄宿舎廃止・家政専攻科設置 同窓会誌「ポプラ」から「いしずゑ」へ		
		1929年	「国語漢文専攻科」「家事裁縫専攻科」廃止
1934年	同窓会を「桜映会」とする		
		1936年	研究科の延長として鴨沂学園を開校
1938年	谷口校長　就任		
		1941年	鴨沂保育園を開園する
		1942年	鴨沂結婚相談所を開所
1943年	さくら幼稚園　設置		

表 1 は両校の主な沿革を示したものである。和高女の初代校長は渥美千代という女性教諭（校長兼務）である。彼女は後に府一の教員となる。その後も女性教諭が校長を兼務し、1901 年の県立移管に伴い正式な校長として男性の校長が迎えられた。1903 年～1920 年代

[3]　ただし黄、稲垣、貫田の研究は、現在の視点から女学校のクラス会や同窓生集団の意味と機能について分析したものである。

前半までは園部校長時代、その後 1930 年代後半までが松扉校長時代、さらにその後は谷口校長時代となっている。一方の府一は、1890 年～1910 年代後半までが河原校長時代、その後 1920 年代前半までは大石校長時代、さらに鈴木校長時代へと続く。

３．講演会記事と寄稿文の分析

最初に、誰の記事が同窓会誌に掲載されていたのか確認しておこう。表 2 は同窓会誌に載せられた講演会記事や学校側が依頼した寄稿文の執筆者（講演会記事は講演者）の比率を示したものである。両校に共通しているのは、「校長」「教員」「博士・専門家」を合わせた記事で 85%以上を占めているということである。ただしその構成比率には違いが見られる。

和高女の執筆者は、「教員（旧教員を含む）」が 47.1%と最も多くを占めており、次が「校長」の 25.3%となっている。一方の府一は「校長」が 31.7%と最も多いものの、僅差で「博士・専門家」という高い学歴を有する権威ある人物による記事が多い（30.7%）。この、「博士・専門家」の値は和高女の約 2.5 倍程度を占めている。

それに対し和高女の場合は、「軍人」や「宗教家」、あるいは「その他（修養団理事や新聞記者　等）」の人物による講演内容が府一よりも多く載せられているのが特徴的といえるだろう。なお、「会員」によるものは、そのほとんどが「〇周年記念号」、あるいは校長の退職に際して女学生時代の想い出について寄稿した文章であった。

表２　講演会記事と寄稿文の執筆者

	和高女	府一
校長	25.3%	31.7%
教員	47.1%	26.7%
博士・専門家	12.6%	30.7%
軍人	2.3%	1.0%
宗教家	4.6%	2.0%
会員	3.4%	6.9%
その他	4.6%	1.0%
	100.0%	100.0%
	N＝87	N＝101

では、具体的にどのような内容が語られ、何が主張されていたのか、記事内容の特徴について 1910～1920 年代と 1930 年代以降に分けてみていくことにしよう。

3.1　権威ある学者や専門家による知識の教授―1910～1920 年代①

まず、府一の特徴としていえることは、すでに講演者と執筆者の構成比率のところでも述べたように、権威ある専門家によって語られる記事が多いということである。たとえば『鴨沂会雑誌』45 号（1919 年）には京都帝国大学教授で法学博士の末広重雄がパリ講話会議と国際連盟に関する内容を述べた「巴里会議に就いてのお話」が載せられている。翌号の 46 号（1920 年）には法学博士仁保亀松京都帝国大学教授による「家族制度について」という民法に関する内容、54 号（1924 年）には再び末広重雄教授が「日米問題について」講義を行い、65 号（1929 年）には「金解禁と現下の経済界」が経済学博士京都帝国大学教授によって語られていた。これらはいずれも国際情勢や法律に関する高度で専門的な内容であり、妻や母役割とは何ら関係のない学問知識が伝えられていた。

和高女のほうはどうだろうか。知識に関する内容は和高女の同窓会誌にも載せられている。しかしながら、その語り手や執筆者は、府一ほど権威の高い人物とはいえない。たとえば、『ポプラ』2 号（1917 年）の「メンデリズム概観」という記事はメンデルの遺伝法則について説明したものであるが、その執筆者は和高女の教員であり、専門的な研究者によるものではない。また 8 号（1923 年）の「仮名に就いて」、「人体の栄養に就て」も学校内の教員が執筆している。では学校外の人物による記事はどうか。たとえば 8 号（1923 年）に「五・六月の花卉と蔬菜」、10 号（1925 年）に「家庭と園芸」という記事が載せられている。しかしどちらも校内の恒例行事である園芸品評会での農事試験場技師による講演内容を記事にしたものであり、家庭菜園や家庭園芸に役立つ内容となっていた。社会経済に関する内容については 10 号（1925 年）に大阪毎日新聞社記者による「家庭経済と国民経済」という講演記事が載せられている。そこでは海外貿易と日本経済の状況について述べられたあと、消費活動を担う主婦の役割として貯蓄と勤倹が奨励されている。つまり、社会情勢の知識は主婦が取り組むべき課題と結びつけられて伝えられていたのである。

3.2　社会情勢の理解と生活改善―1910～1920 年代②

さて、小山（1991、1999）によれば、第一次大戦後に良妻賢母思想の再編がなされ、高等女学校では科学思想の導入や運動が奨励されていくようになったという。また、家庭の主婦を対象としては、大戦後の米不足や物価高騰への対応策として節約や副業の奨励、生活改善運動が政府主導ですすめられていたことが明らかにされている。

このような社会情勢の変化とそれに対する中央の方針が積極的に語られていたのは、和

高女の同窓会誌のほうである。たとえば、『ポプラ』2 号では、園部校長が「今後の女子」のなかで、次のように語っている。

> 昔日の良妻賢母は頗る家庭的にして舅姑には従順、夫には貞操、子女には厳格、主として此方面の性質をのみ、貴んだのである。然し、今日の良妻賢母は是のみにては不完全である。更に進んで国家及び社会方面に関する大体の知識の修養がなければならぬ。(中略) 女子も明に国民の一半である、国家成立要素の重要なる半分である。されば国家の一員と云ふ点より見ても女子は今少し国民的自覚を為さねばならぬ。(中略) 又一家を処理する主婦としても古の如き質実にして勤労、堅忍にして自制ある確固凛々たる気質を養ふと仝時に他方に於ては家事、裁縫、洗濯、割烹、看護、育児等凡そ女子の為すべき仕事に関し新進の学理を応用し以て遺憾なきを期せねばならぬ、又余力あれば此公共生活に於て社会公共の為めに幾分なりとも公共的義務を尽すの覚悟なければならぬ。」　　「今後の女子」『ポプラ』２号（1916 年）

さらに、『ポプラ』３号では女性教員が「家庭経済に就て」という記事で、大戦後の物価高騰に触れ、「支出を省くといふことも大切ですが、之れと同時に収入を増すといふことも考へねばならないことで、在来の我国婦人はこの点には誠に縁遠かつた様に思はれます（極く下層の社会は共稼といふこともありますが)」と、卒業生たちに副業を提案するが「余暇をもつて傍らにする仕事」と注意を付け加えることを忘れない。また４号の「食料問題に関し卒業生諸氏の努力を望む」という校長による記事では、米不足を「国民の死活問題」ととらえ、中流階級（に属する会員たち）に自覚を促している。こうした内容は校長自ら、あるいは教員が中央に出向き、高等女学校長会議や文部省主催の講習会に参加することで世の中の動向や最新知識を仕入れ、講話や同窓会誌を通じて在校生や卒業生に伝えるのである。同様のことは『ポプラ』6 号（1921 年）、7 号（1922 年）でも行われている。和高女教員の高橋貞が母校の東京女子高等師範学校で行われた文部省主催の生活改善講習会と内務省衛生局主催の「妊産婦及児童の衛生」講習会に出席した際の内容を同窓会誌上で伝えている。そしてこれらは単なる家事や育児に関する知識の伝達という位置づけではなく、ここでも社会情勢とのかかわりを交えて国家的な課題のひとつとして論じられるのである。

一方の府一では生活改善にかかわるような内容のものは乏しく、『鴨沂会雑誌』45 号

（1919 年）に大石校長による「生活改造の根本義」という文章が載るくらいである。しかしながら、物価高騰への対処法として節約や副業をすすめるのではなく、衣服装飾品に対する欲望を美術展・音楽会に対する審美欲や講演会に対する知識欲へと向けるようにすすめる「欲望の整理」、「生産の増加」として上流の家庭でも簡単にできる生産活動（たとえば山茶花の生け垣にかわりに茶の樹の生け垣をつくることや邸宅の周囲に渋柿を植えることなど）のすすめ、そして自覚した意義ある生活を送り、生命の価値を創造することの大切さを説く「真生命の創造」の３点について述べている。このように、府一の同窓会誌では政府が期待したような主婦のあり方､すなわち家計を節約することや虚礼を廃すこと、合理的に家事を行うことについてはほとんどふれられておらず、こうした問題は府一卒業生にとって積極的に取り組むべき課題とはとらえられていなかったことがうかがえるのである。

3.3.　婦人問題への反応―1910 年～1920 年代③

また 1910 年代～1920 年代といえば、大正デモクラシーの気運のもと婦人参政権や女子教育問題など各種「婦人問題」に関する議論と運動が活発化した時期でもあった。

和高女でも 1920 年代になると婦人の「目覚め」や「自覚」という言葉が散見されるようになる。たとえば『ポプラ』7 号（1922 年）の「婦人の自覚」のなかでは校長が下記のように婦人問題について取り上げている。

> 維新後女子は､普通教育を受けることになったが､併し国民の女子に対する思想は、依然として元の通りで､社会及家庭に於ける女子の地位も､殆んど向上されてゐない。教育も男子に比して、一般に低い程度に止められて居る。さうして女子は理智に暗いとか、保守的であるとか、意気地がないとか、無能であるとか云って、無暗に世人が女子を非難するのは、寧ろ云う方が間違つて居るのである。
>
> 「婦人の自覚」『ポプラ』7 号（1922 年）

そこでは女性の地位が向上しなかった原因のひとつとして女子が男子と同等の教育を受けられなかったことを指摘している。しかし、結論としての主張は「権利の主張よりも自己の修養、男子の非を責めるよりも、婦人自らの非を認め、婦人の長所を吹聴するよりも、男子の長所を学ぶ事が今日の急務であらう。」と、個人の学びや修養へと向けられてい

た。同窓会総会における児玉充次郎（牧師）の講演、「女性の目覚め」もまた、これまで女性の人格が尊重されず従属を強いられてきたことを述べ、女性の「自覚」と「目覚め」の必要性を説いている。だがここでも卒業生たちに語るのは、男性に侮られないよう修養をつむことや「くじびきのような結婚」を避けることくらいであった。つまり、和高女ではこれまでおかれてきた女性の地位の低さについて問題視はするものの、だからといって積極的に行動を起こすことを卒業生たちには求めていなかったと考えられる。

それに対し、府一の同窓会誌では女子教育の向上と発展に対する強い関心と意義について何度も主張され、今後進むべき方向性と方法を卒業生たち具体的に示していた。たとえば『鴨沂会雑誌』47 号（1920 年）では、仁保亀松顧問（京都帝国大学法学博士）が女子にも男子の高等教育と同等の教育が必要であることを説き、1920 年の高等女学校令改正によって設置可能となった高等科の設置計画とその実現に向けて基金募集を呼びかけていた。

> 女子をして其の自覚心を善導し其の自信力を活用し更に其の責務を完行し男子と相連携して真正の文化を実現し国家の実力を充足せしむるには最先の急務として女子教育の充実発展を計らざるべからざるはさらに黎明を要せざる処とす。即ち現在の女子教育の内容を充実するのみならず、益々その程度を昇進して男子の高等教育と同等のものたらしめざるべからず。
>
> 余は理事各位に対しこの機会に於て会員一同の協力に依り相当の基金を募集し其の利子を以て母校を援助し母校をしてその将に増設せられんとする高等科の内容を充実せしめて益々諸般の設備を完成し更に進みて必ず到来すべき女子大学増設の気運に備ふることを得しむるをもつて記念事業と為すべきことを提案して各位の参考に供したり。
>
> 「鴨沂会記念事業の基金募集に就きて」『鴨沂会雑誌』47 号（1920 年）

同号には大石校長による「女子の高等教育と其の生命の高調」も載せられており、女子高等教育への強い関心が見て取れる。その後も毎年のように女子高等教育にかける取り組み状況が報告されるのである。この方向性は、『鴨沂会誌』56 号（1925 年）に載せられた仁保亀松顧問の講演「婦人運動について」でもかわらない。彼は西洋における婦人運動の歴史や日本における女性の現状を述べ、婦人運動の必然性や正当性を認める。しかしなが

ら、やはり鴨沂会員の向かうべき方向は政治的な要求運動ではなく、女子教育の向上発展であると述べるのである。

> 会員諸姉に対し切に希望せざるを得ざることがある会員諸姉は今以て経済上物質上の要求を目的とする婦人運動を起さるゝ必要はなからう。併しながら法律上政治上若しくは社交上の要求を目的として運動を起す必要を認めらるゝ会員は少なくないかもしれぬ左れど着実を旨とする鴨沂会の会員としては先づ女子教育の向上発展を目的とする運動を起こさるゝことを以て適切にして且つ必要なりと信ずる。然も盡く中等教育を修了して現に社会生活の中流以上に立たるる四千の会員を有する本会に於て婦人運動に関し何等の抱負もなしとせば遺憾千万の感なきを能はざる次第である。
>
> 「婦人運動について」　『鴨沂会雑誌』56 号（1925 年）

さて、1920 年代後半期からの鈴木校長時代になると、次なる目標である女子専門学校設立に向けて動き始める。58 号（1926 年）の「我国における女子高等教育」、翌号 59 号（1926 年）の「プラトーンの女子教育観」、64 号（1929 年）の「教育の機会均等」はいずれも鈴木校長によるものであり、女子にも男子と同等の高等教育機会を与える必要性を繰り返し主張していた。これらの記事のなかでは女性の本分や特性は強調されず、むしろ女子と男子の能力にはさほど違いはないということが述べられるのである。

3.4　「母性」と「愛」の力―1930 年代以降①

ところが 1930 年代になると両校ともそれまでとは異なる論調に変化し、「母性」や「愛」の力が女性の本能であり本分であるということが伝えられていくようになる。

たとえば、和高女では文学博士椎尾辯匡（佛教学）が「女性の任務について」の講演で、日本の教育が男子中心になっていること、日本女性が職業上の能力を発揮できていないこと、日本女性に正義と愛国の精神が欠けていることをドイツと比較しながら指摘する。そして、女性には「愛」の心が最も大切なものであるということを述べるのである。

> 婦人の最も大切なのは愛の心である。女は純な愛の塊でなくてはならない。そして此の愛は総てのものに対して注がれなくてはならないのである。婦人がその使命によつて妻となり母となつて親としてその子に与へねばならぬ最も大切な事は何であるか。

それは有り難いと云ふ感謝の念でなくてはならぬ。女性の胸の中には有り難さ尊さが充ちて居なければならない。女の胸１つによつて日本の国が明るくもなり暗くもなり進みも行きづまりもするのである。

かよわい女性の力でもその純な力、真の力、愛の力、献身的精神は偉大なものである事が幾多の女性によつて示されているのである。我々にはその力が潜んでゐる、何処迄も正義を守っていくといふ事が一人の胸にでも宿つてゐるならば全日本を生かす尊い力となるのである。天地を愛し国家を愛する心がなくてはならない。本当に天地人道を愛する精神を養うて真の女性の任務を完うせねばならないのである。

「女性の任務について」『いしずゑ』15 号（1930 年）

また、『いしずゑ』19 号（1934 年）には、イタリアのファシズム運動を日本に紹介した人物として知られる下井春吉の講演記事「伊太利婦人の進む道」が載せられ、情愛をもってする仕事が女性の仕事であることや、女性がもつ「愛」の力の偉大さについて述べられていた。

彼女たちは「伊太利の男女はその受持分野が異なってゐる」と考えへてゐる。伊太利の女の仕事は情愛を持つてする行為が女の仕事である。即家庭に於ては良妻賢母、社会に於ては教育慈善事業等を指すのである。

愛情とは形に現されるものではない。心の奥底にある大きな力なのである。この偉大な力を保持してゆくのは日本の婦人である。日本婦人が形における愛情よりも心底に偉大な愛の力を貯えてゐるからこそ日本は強いのである。此の強い女性の愛の力によつて我が国の根源が出来るのである。

「伊太利婦人の進む道」『いしずゑ』19 号（1934 年）

さらに同号の「日本立国の基礎について」においても修養団本部理事の牧野秀が「明智」「愛」「正義」を人の本性とし、とりわけ「愛」を女性の本能と述べていた。

府一では井上秀子（府一卒業生・日本女子大学長）が、自分自身の生き方を例にあげながら、家庭役割と公職（とりわけ教育職）との両立を果たしていてもその根本は母として

の存在にあると述べ、「如何なる婦人も母として立つ特殊の能力を天から与へられてゐるという自覚をもつべきです。即ちどんな人も母性愛を豊かに恵まれてゐると考へます」と、母役割をことさら強調する。そして女子の自覚とは母性を自覚することであるということ、母性愛を我が子だけに向けるのではなく他家の子どもへ、さらには広い世界へと拡大していくことの大切さを語るのである[4]。

> 最近女子に自覚を促されますが、この自覚はその母性たる点に自覚すべく又培ふべきであります。更に進んでは自分自身の生んだ子をよく育てる事に満足するだけでは時代の進運に伴ふことは出来ません。母性愛は更に拡大して我祖国の子供をよく育てる事に及び、更に発展しては我人類の種属を保護する活動に迄進むべきでありませう。今日は教育事業、社会事業、又国際的に働く女性もありますが何れも婦人の母たる徳を拡大したに過ぎません。自分の子を良くするといふ事にその人の動きが限られてゐるのは昭和の婦人ではありません。それは拡大して広い意識の下に広き世界に働きかける事が大切です。　「母校六十周年記念に際して」『鴨沂会雑誌』71 号（1932 年）

3.5　「非常時」における心構えと女性の責務―1930 年代以降②

満州事変を境に、論説記事や講演会記事には戦時体制を反映した内容のものが増える。その内容は、国体観念に関するもの、国際情勢や戦局に関するもの、そして「非常時」における心構えと女性の責務について述べられる。

和高女では 1910 年代からすでに軍人による講演会記事が載せられていたが[5]、それに加え、1920 年代後半からの松扉校長時代になると校長自ら国体観念に言及する記事が増えていった。『いしずゑ』18 号（1933）の「荒木陸軍大臣講演要項（国防協会発会式にて）」や大阪毎日新聞顧問の久留島武彦による 20 号（1935 年）の「国防線の意義」、校長による 20 号（1935 年）の「教育と宗教的信念について」、同じく校長による 21 号（1936 年）の「尊厳なる我が国体の根本義に就て」などがこういった内容の記事にあたる。これらの

---

[4] この「母性愛の拡大」については、和高女における講演会「若き婦人のために」『いしずゑ』13 号（1928 年）でも述べられている。講師は 1920 年代に新中間層向けの科学的育児に関する講演を数多くこなしていた医学博士の三田谷啓。彼もまた母性愛を我が子だけに向けるのではなく他家の子どもへと広げていくことが日本社会の安定、発展へとつながると話していた。三田谷の活動に関しては、首藤美香子の『近代的育児観への転換　―啓蒙家三田谷啓と 1920 年代―』（2004）に詳しい。

[5] たとえば、1930 年の『いしずゑ』15 号には金子大佐による「国粋の力」が載せられている。

記事には国際社会のなかで日本がおかれている状況と政府の方針が具体的に説明されており、時局の理解と国家意識の涵養がその最も大きな目的であったと思われる。

府一のほうはそれまで国家の一員としての自覚をもつことや主婦としてのあり方についてはほとんど主張されてこなかったが、この時期にいたってようやく国家の方針が積極的に語られるようになる。『鴨沂会雑誌』72 号（1933 年）には前大阪毎日新聞記者の長永義正による「非常時の日本の経済」、73 号（1933 年）には法学博士の下村宏による「非常時日本」、75 号（1934 年）には陸軍少尉の服部兵次郎による「戦時に於ける国旗の光」、同号に三高教授　藤田元春の「お米への感謝」、82 号（1938 年）には法学博士神戸正雄の「時局における婦人の務」、相国寺管長の山崎大耕による「陰徳について」、84 号（1939 年）鈴木校長の「時局の進展と女性の責任」、88 号（1941 年）には同じく鈴木校長による「大政翼賛運動と同窓会」が載せられている。ここにはこれまで述べられてこなかった国家意識をもつことの重要性だけでなく、主婦と消費経済の関係性や貯蓄と節約の必要性、また戦時期において女性にのみ期待される役割（出征兵士の見送りや慰問活動）の意味について強い口調で語られていた。ここにおいて、和高女と府一の論調にほぼ違いは見られなくなり、政府の方針に沿ったものとなったのである。

4.　卒業生たちの行動―活発化する同窓会組織の活動

ではこれまで述べてきた学校側の主張に対し、卒業生たちはいかなる行動をとっていたのだろうか。同窓会組織の動向に注目しよう。

井上（2008）の研究でも説明されていたように、高等女学校の同窓会組織は本部（母校に置く）と地方支部、役員と一般会員に分かれ、役員は「事業部」「会計」などの部局に分かれて活動を進めていた。活動内容としては、会員同士の連絡と親睦を深めるためのクラス会や支部会活動がよく知られているが、同窓会組織の活動はそれだけではなかった。年一回母校で開催される同窓会総会、知識や教養を高めるための講演会や講習会の企画、家事技能を高めるための講習会、母校の充実・発展に向けた活動、そして社会活動を行っていた。

これらの活動が活発化するのは、和高女の場合 1920 年代以降である。「洋服講習」「ビーズ編物講習」など裁縫や手芸に関する講習会開催の他、大阪朝日新聞社主催の全関西婦人連合大会への出席、また生活改善に関する講習会も行われていた。生活改善に関しては、

『ポプラ』10 号（1925 年）に「申合せの趣意」が同窓会誌の巻頭ページに載る。ここには「挙国一心此の難局に当ることは国民として当然尽くさねばならぬ責務であります。殊に社会の儀表に立ち其の中堅たるべき我が同窓会諸賢姉は一層高く強く此の責任を感じ我が帝国の復興進展に真剣の努力を致さねばならぬと思ひます」とあり、実行要目として「時間に関する事項」「服装に関する事項」「社交礼儀に関する事項」「金銭等に関する事項」「食物に関する事項」についてそれぞれ中央の方針どおり、具体的に実行すべき事柄が挙げられていた。また関東大震災発生後には義援活動[6]、戦時期には出征兵士への慰問活動など、その時々で国家が望む社会奉仕活動を行っていた。さらには、母校の教育環境の充実（講堂や図書館建設など）に向けた寄付金の徴収やバザーの開催、後輩たちのために購買部の運営[7]にも主体的に携わっていたのである。

府一のほうはどうだっただろうか。先に見たように、府一では 1910 年代から女子教育の充実・発展に力を入れていた。そこでは深い教養と高い学問的知識を身につけることと、本科課程卒業後の教育機会を広げることが目指されていた。

> 三千五百の会員を有する鴨沂会は既に其の数量に於て本邦婦人団体中の上位を占むるのみならず其の素質に於ては優に一頭地を抜くと言ふも敢て誇張の賛辞にあらず。何となれば会員諸姉は夙に女子教育界の模範たりし母校に於て優良の薫陶を受け良く其の業を卒へたるものなれば諸姉の団体たる鴨沂会は実に彼の会員の品位及学力如何を問はざる普通の婦人団体とは全く其の成分を異にすればなり。（中略）全国高等女学校の模範として名誉を維持して然も最先に創立満五十年の記念式を挙行せんとする母校が挙式と共に今後の計画に関し周到の注意を拂ひ十分の準備を整ふることを要するは、愛校心に富みたる会員諸姉の斉しく是認せらるゝ処にして本会が母校の記念式に当り深厚の祝意を表する為めに決行せんとする記念事業を選定するに就きては、須く此点に注意せざるべからず。
>
> 「鴨沂会記念事業の基金募集に就きて」『鴨沂会誌』47 号（1920 年）

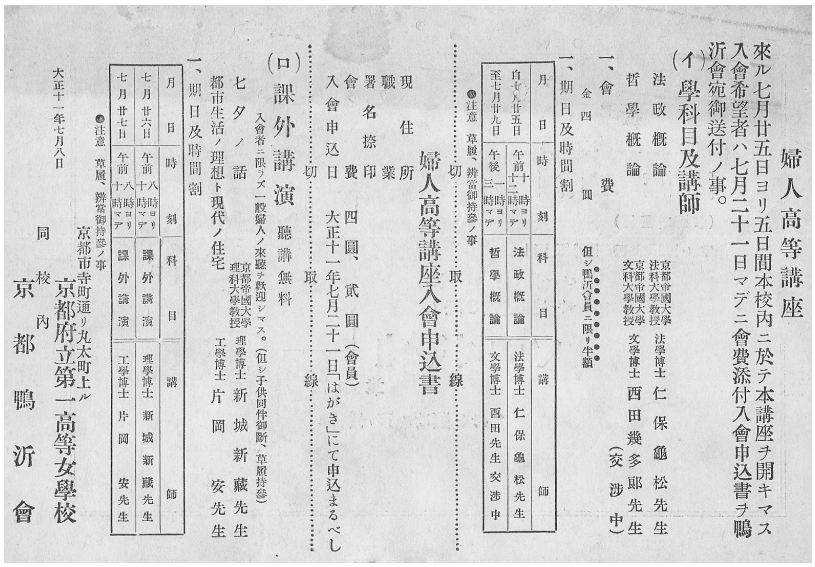
---

6 具体的には、義援金の寄付、下駄やちり紙の寄付、綿ネル着物１千枚の裁縫の他、震災地児童保護のため和歌山県連合婦人会へ寄付、全和歌山婦人会主催和洋音楽会の純益を布団毛布料として大阪朝日新聞社へ寄贈した。

7 購買部の設置については、和高女初代校長の渥美千代が府一教員時代に鴨沂会員の様子を和高女卒業生に知らせるということもあった。そのひとつが府一敷地内に設立された鴨沂会館１階の購買部の様子である。鴨沂会員が事務を営み母校生徒のために廉価で学用品を供給している様子を和高女の会員たちは渥美から見習うべき行動として伝えられた。

学校側は、鴨沂会を他の婦人団体とは学力・品位ともに異なる模範的団体であると位置づけ、その優良なる婦人団体にふさわしい行動として母校発展への協力を呼びかけていた。そしてそうした要求は、同窓会本部から同窓会誌を通じて各会員たちに発信され、多額の寄付金を徴収することで「高等科」「京都府立女子専門学校」「鴨沂会館」「室内温水プール」などが次々と設立されていった。また戦時体制期には時局の要請に応える形で、和高女と同様に戦争協力のための社会奉仕活動も行っていた。

ただし、同窓会組織は学校側からの寄付金の要求や時局の要求にただ応えるだけでなく、独自の活動も行っていた。そのひとつが和高女にもその活動が伝えられ実現化した学校購買部の運営である。そしてもうひとつ力を入れていたのが、学びの場の企画・運営である。そして 1919 年からは同窓会員以外の一般婦人も受講可能な公開講演会や公開講座を開始している。たとえば図 1 にあるように、1922 年には京都帝国大学教授が講師をつとめ、「法政概論」「哲学概論」といった高度な専門講義を行う「婦人高等講座」（会費必要・鴨沂会員は半額）の他、「課外講演」（会費無料）を開催している。


婦人高等講座

來ル七月廿五日ヨリ五日間本校内ニ於テ本講座ヲ開キマス
入會希望者ハ七月二十一日マデニ會費添付入會申込書ヲ鴨沂會宛御送付ノ事。

（イ）學科目及講師

法政概論　京都帝國大學法科大學教授　法學博士　仁保龜松先生
哲學概論　京都帝國大學文科大學教授　文學博士　西田幾多郎先生（交渉中）

一、會費　金四圓　但シ鴨沂會員ニ限リ半額

一、期日及時間割

月日	時刻	科目	講師
自七月廿五日至七月廿九日	午前十時ヨリ十二時マデ	法政概論	法學博士　仁保龜松先生
	午後三時ヨリ四時マデ	哲學概論	文學博士　西田先生交渉中

●注意　草履、辨當御持參ノ事

切……取……線

婦人高等講座入會申込書

現住所
職業
署名　捺印
會費　四圓、貳圓（會員）
入會申込日　大正十一年七月二十一日「はがき」にて申込まるべし

切……取……線

（ロ）課外講演　聽講無料

入會者ニ限リ一般婦人ノ來聽ヲ歓迎シマス。（但シ子供同伴御斷、草履持參）

七夕ノ話　京都帝國大學理學博士　新城新藏先生
都市生活ノ理想ト現代ノ住宅　京都帝國大學理科大學教授　工學博士　片岡安先生

一、期日及時間割

月日	時刻	科目	講師
七月廿六日	午前八時ヨリ十時マデ	課外講演	理學博士　新城新藏先生
七月廿七日	午前八時ヨリ十時マデ	課外講演	工學博士　片岡安先生

●注意　草履、辨當御持參ノ事

京都市寺町通リ丸太町上ル
京都府立第一高等女學校
大正十一年七月八日
同校内
京都鴨沂會

図１　婦人高等講座・課外講演の申込書（『鴨沂会雑誌』第 50 号（1922 年）裏表紙）

さらには府一では正式な学科課程とは別に、同窓会組織が 1927 年に「研究科」を設けている。ここでは家事・裁縫を中心とする実際的な科目の講習会が多く開かれていた。この「研究科」が発展した形で 1936 年に開校されたのが修業年限 1 年の「鴨沂学園」である。学園則の第 1 条には「高等普通教育ノ完成ヲ計リ一家の主婦タルノ修養ヲナサシムルヲ以テ目的トス」（『鴨沂会雑誌』78 号 pp. 20）と書かれており、その内容は修身と国語

（国文・習字）の他は、家事（児童心理・育児・衛生・料理・珠算・タイプライティング）、裁縫（和裁・洋裁・手芸）、音楽（唱歌）、茶儀、生花であり、なかでも家庭生活に直結する家事・裁縫に最も多くの時間があてられていた。府一顧問の仁保亀松京都帝国大学教授に「花嫁学校」と呼ばれたこの「鴨沂学園」は、府一が目指してきた高い教養や深い学問知識とは異なる方向性をもつ極めて実用的な内容のものである。しかし、それまで学校外で行われていたこうした結婚準備教育を同窓会組織が引き受けるようになっていたということは興味深い。その後も 1941 年には同窓会組織が運営する「鴨沂保育園」、その翌年には「鴨沂結婚相談所」を設立している。

同窓会組織が独自に学校経営をはじめるのは、和高女では 1940 年代に入ってからである。和高女では 1928 年に設置された修業年限 1 年の「家政専攻科[8]」を 1942 年に同窓会経営の「桜映学園」に組織変更し、洋裁に主力を注いだ実用的な教育を行っていた。さらには 1943 年には同窓会組織運営の「さくら幼稚園」も開校されている。

実用的な結婚準備教育機関と保育・幼児教育機関設立が戦時体制期における両校に共通した活動であったといえるだろう。

5. まとめと考察

本稿は和歌山市と京都市に位置していた公立名門高等女学校 2 校の同窓会誌を分析素材とし、論説記事と講演会記事の検討から学校側が卒業生たちに望んだ卒業後のあり方と、卒業生側の動きとして同窓会組織の活動について検討した。

まずは、論説記事と講演会記事の分析結果からまとめていこう。和高女も府一も「校長」「学校教員」「博士・専門家」による記事でそのほとんどが占められていた。しかし、その構成比率は学校の威信の差によって違いが見られた。和高女のほうは「学校教員」による記事がもっとも多かったが、府一では「校長」「博士・専門家」による記事がほぼ同じ比率で載せられていた。府一ではとりわけ京都帝国大学教授による記事が目立ち、権威ある学者が妻役割・母役割とは距離のある専門的な学問知識を伝えていた。この差は、学校の置かれている地域の教育文化的な環境の違いによるところが大きかったと考えられる。というのは、和歌山に設置されていた高等教育機関は、1922 年設立の官立和歌山高等商業専門学校ただ 1 校のみであったのに対し、京都には数多くの高等教育機関が存在していたからである。そのなかでも京都帝国大学は府一と地理的にも非常に近く、特に親和性が高かっ

8　文部省に認可された正規の専攻科ではなく、補習科のような位置づけであった。

たのではないだろうか。

では、両校が求めた卒業後のあり方とはそれぞれどのようなものだったのか。1910 年代～1920 年代の和高女では、第一次大戦後の物価高騰や食糧問題、生活改善運動など主婦として取り組むべき課題について政府の方針に沿った行動を卒業生たちに期待していた。また知識に関する記事内容も、家庭生活といかに関連しているのかという観点から伝えられていた。そして常に国家の一員であるという自覚と心構えをもつことの重要性が強調されていた。「国家意識をもち、広く社会情勢を理解し、近代的知識にもとづく合理的な家庭運営を行う主婦」、これが地方都市和歌山市の名門高等女学校である和高女が望んでいた卒業後の姿といえるだろう。一方、和高女より威信の高い府一では主婦としての心構えや日々の主婦業にかかわる具体的な内容はほとんどなく、一人の人間として高い知識と教養を身につけることの大切さが説かれていた。それには、府一卒業生たちが所属する社会階層の高さが関係していたと考えられる。華士族の娘の教育を目的として設立されたという背景をもつ学校であることから、宮家の娘を筆頭として、経済的にも文化的にも恵まれた階層女性が多かった。そのため、物価の高騰も食糧問題も家事の合理化も、府一卒業生たちには切迫した課題とは捉えられていなかったのかもしれない。

両校の主張の違いは、婦人運動に対する反応にもあらわれていた。和高女でも婦人運動への理解は一応のところは示していたものの、具体的に何らかの行動を起こすことは期待していなかった。しかしながら府一では、府一卒業生が取り組むべき課題を女子高等教育の実現に的を絞り、主に寄付金の要請という形で卒業生たちの協力を仰いでいた。

ところが 1930 年代に入るあたりから、両校の主張にはさほど違いが見られなくなっていった。女性の特性として「愛の力」と「母性愛」をことさら強調し、また戦時体制期には政府の方針に沿ったかたちで国民としての自覚と女性の責務が語られていたのである。

それでは卒業生側の動きとして同窓会組織はいかなる行動をとっていたのだろうか。本稿では、クラス会等の親睦を深めるための会合以外の活動に着目した。両校に共通していたのは、母校の充実・発展に向けた活動と、学びの場の企画・運営である。そしてこうした活動が、同窓会組織が独自に運営する学校設立へとつながっていった。これらの学校は、結婚準備教育ともいえる実用的な科目に主力をおいた家政教育と、保育や幼児教育を行っていたところに特徴がある。このうち乳幼児を対象とした事業については、女性の労力を保育の分野に動員しようとする国家側の方針が反映されたものであるという見方があるだ

ろう。なぜなら 1943 年の「学徒戦時動員体制確立要綱」[9]によって全国の高等女学校に実習を兼ねて幼稚園や保育所の設置を奨励しているからである。また、保育や幼児教育という分野が従来の女性役割の延長にすぎないという見方もできるだろう。だが、たとえそうであったとしても、従来私的領域である家庭内で行われてきた家事や育児といった女性役割に関して、同窓会組織が学校という公的な領域で事業運営を行っていたという事実は、非常に興味深い点であった。男性と競合しない分野において、両校の同窓会組織は、公的領域で活動を行っていたのである。

以上検討してきた結果、1910 年代～1920 年代の高等女学校の「あるべき卒業生像」には、都市規模と学校の威信の差によって微妙な違いが見られたことが明らかになった。確かに両校とも旧来の女性とは異なる近代的な女性を目指していたが、府一がより高い知識と教養をもった女性を理想としていたのに対し、和高女ではあくまでも政府の方針に沿った近代的な家庭運営ができる女性を理想としていた。しかしながら戦時体制期に向かう 1930 年代以降においては、両校とも「母性」と「愛の力」いう曖昧なものがイデオロギー化され、女性役割を担う国民として統合されていった。そこに共通していたのは、家庭や母校、社会のために無償で献身的に尽くす姿だった。と同時に、女性役割とみなされてきた家政や保育、幼児教育の分野において、公的領域での組織的活動を推し進めていた点も共通していた。それは、戦後本格的に到来する、「母性愛」イデオロギーに彩られた性別分業に基づく近代的なジェンダー秩序の先駆的な体現者の姿であったのである。

さて、本稿は２校の高等女学校を対象とした事例研究である。今回明らかになった学校側の主張や同窓会組織の活動が、公立名門高等女学校の特徴として一般化していえるのかどうか、今後、対象地域を広げることでさらに検証していく必要があるだろう。

＜参考文献＞

天野郁夫 編　1991『学歴主義の社会史－丹波篠山にみる近代教育と生活』、有信堂。

深谷昌志　1968『良妻賢母主義の教育』、黎明書房。

黄順姫　　2002「高等女学校同友会の身体文化」『不良・ヒーロー・左傾—教育と逸

[9]　昭和 18 年 6 月 25 日に閣議決定された。「要領」二、「勤労動員ノ強化」（九）に「女子ニ在リテハ前各項ニ依ルノ外特ニ中等学校以上ノ学校ニ付工場地域、農村等ニ簡易又ハ季節的幼稚園、保育所及共同炊事場ヲ設置セシメ又ハ他ノ経営スル斯種施設ニ於テ保育等ニ従事セシム」とある。

脱の社会学』、人文書院。
稲垣恭子 2007『女学校と女学生　–教養・たしなみ・モダン文化』、中公新書。
井上好人 2008「明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能―石川県立第一高女同窓会誌の「会員消息」記事の分析からー」『教育社会学研究』第 83 集、pp.149－167。
木村涼子 2010『<主婦＞の誕生　婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館。
小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房。
小山静子 1999『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房。
貫田優子 2007、「高等女学校同窓生集団の文化と構造　－京都府立京都第一高等女学校卒業生調査からー」　京都大学大学院教育学研究科紀要　第 53 号。
牟田和恵 1996、『戦略としての家族―近代日本の国民国家形成と女性』新曜社。
長弘真弓・森理恵 2003「京都府立女子専門学校における裁縫教育の意義」『京都府立大学学術報告．人間環境学・農学』55,PP.35-48。
落合恵美子 1989、『近代家族とフェミニズム』勁草書房。
首藤美香子 2004『近代的育児観への転換　―啓蒙家三田谷啓と 1920 年代―』勁草書房。
土田陽子 2004「地方都市における戦前期の新聞メディアと学校イメージ　－高等女学校の威信・階層・学校文化」『教育社会学研究』第 74 集，pp.149－166。
土田陽子　2010「近代地方都市の公立名門高等女学校における生徒文化の特徴と構造　–学校文化と生徒文化の関係に着目して　－」,『GCOE Working Paper 次世代研究 27』,京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」。

2010 年度次世代研究「公立名門高等女学校の同窓会誌における理想的女性像の構築――和歌山県・京都市・神戸市との比較分析から――」（研究代表：土田陽子）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2010 年度プロジェクト時点

土田 陽子 （京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）